The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	幕末から明治初期の英文典にみる「動詞の変遷」に纏わる一考察 : Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs の訳述起源について
Author(s)	佐古, 敏子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2014, 2013, p. 17-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72847
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

幕末から明治初期の英文典にみる「動詞の変遷」に纏わる一考察
― Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs の訳述起源について ―

佐古　敏子

1. はじめに

本論文は幕末から明治初期にかけて、幕府に献上、或いは刊行された英文典を主な資料として、Werkwoorden / verbs（「動詞」）殊に Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs（筆者注：現用の訳語「いわゆる非人称動詞」にあたる。以下、「非人称動詞」と略称）について、その訳述変遷過程を中心に調査、検討する。併せて、筆者の意図はその訳語の類型を分析することで、「非人称動詞」なる訳語が我が国で、初めて扱われた英文典を推定すべく、追求しようとするものである。

2. 先行研究とその問題点

幕末から明治初期の英文典に関する内容的考察に特化した研究は勝俣詮吉郎、重久篤太郎、豊田實、竹村覺、井田好治各氏をはじめとする先行研究に負うところが大きい。しかし、その多くは品詞分類に纏わる文法用語一覧表の作成に留まった研究に限られたものであり、中でも「動詞」に係る研究では先述の井田好治氏をはじめ、続いて杉本つとむ、岡田和子、飛田良文、朱鳳そして水野修身各氏のほか、あまりなされていない[1]。殊に、「非人称動詞」なる訳語とその解説、例文(句)などの内容に踏み込んだ研究となると、筆者が調査した限りでは井田好治[2]、杉本つとむ[3]の両氏に限られた実状を確認することができる。

因って、筆者は先ず、当該期における我が国の英文典から Werkwoorden / Verbs（「動詞」）に関する訳語、例文（句）の一覧表を作成、これを別表とした。本稿では、左記一覧表を基に Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs に纏わる訳語と概念、定義、或いは、例文(句)などを引用の上、比較、検討を行い、その変遷を考察する[4]。

3. 本研究対象と研究方法

---

[1] 各先行研究の詳細については、本論文【参考文献】を参照されたい。
[2] 井田好治「明治における英文法範疇・訳語の変遷」（『言語科学』第 4 号、九州大学言語会、1968)。
[3] 杉本つとむ『英文鑑―資料と研究―』ひつじ書房、1993、<研究篇>　583~673 頁。
[4] 一覧表(筆者により作成)から各訳述英文典、並びに底本とされる原書を併記し、これを表【Ⅰ】～【6】に区分した。一覧表は別稿を期す。

我が国において、幕府に初めて献上された本格的な英文典は天保 11 - 12 年(1840 - 41) 渋川敬直(六蔵)訳述、藤井資補訂『英文鑑』であることは周知のところであるが、これより遡ること、およそ 30 年、英学黎明期[5]の所産ともいえる、初の英和対訳辞典、文化 11 年 (1814)『諳厄利亜語林大成 (以下、『語林大成』と略称) 』「凡例」においても、八品詞とした簡略な英文法論が付されている。さらに、文久 2 年 (1862)『英吉利文典』(俗称『木の葉文典』)、その簡易辞書とされる慶応 2 年 (1866)『英吉利文典字類』等の各英文典を本論文の研究対象とし、Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs の訳述起源について考察する。加えて、左記訳述英文典については底本とされる原書から同じく当該箇所を引用の上、照合、検討する。

ここで、注目すべきは先の『語林大成』また、『英文鑑』に代表される英文典はまさに蘭学から英学への言語学習の推移を示す貴重な言語資料ということにある。この点で、一連の変遷を比較、検討の必要から、参考として『訂正蘭語九品集』『和蘭文典便蒙』或いは『譯和蘭文語』の当該箇所を適宜、引用の上、比較、検討を行う。

明治に入り、我が国で本格的な英語教育が開成所において開始されるにこととなった。これに伴い、多くの英文典が輸入されたが、本論文では慶応義塾で教材として用いられた『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』、大学南校 (開成所後身) で用いられた『格賢勃斯英文典直譯』並びに『ブラウン氏英文典直譯』から Impersonal verbs.に纏わる訳語、解説等も検討視野に入れ、同じくその変遷を考察する。なお、上述した各英文典の書誌的情報については、後述 5.で詳細を確認されたい。

4. 英語史にみる Impersonal Verbs に纏わる歴史的変化とその定義

本論文の主題が我が国で初めて扱われた Impersonal verbs の訳述起源の探究であることから、その検討に入る前に当該期の英語史における Verbs 周辺、殊に Impersonal verbs に纏わる史的発達とその定義について十分な把握が必須と考え、ここでは、まず、Impersonal verbs から Personal verbs への推移期を中心に、初期中英語期から初期近代英語期あたりまでの英語史について概観する。

上述の推移に関する論考について調査した結果、有効な論考がみられたものの、そのほとんどが簡略な解説に留まったものであったが、より端的な定義がなされ、史的発達についても、より詳細に記された論考として、筆者は H. Sweet (1891)[6]、W. van der Gaaf (1904)[7]、衛藤安治 (1979) [8] そして橋本功 (2005) [9]を知ることができた。そこで、左記

---

[5] 諸説あるが、定宗数松『日本英学物語』三省堂 (1939) によれば「フェートン号事件 (1808) からグイド・フルベッキ等が教鞭をとる開成学校設立(1870 頃)に至るまで」を「英学黎明期」と区分する。

[6] Henry Sweet, *A NEW ENGLISH GRAMMAR*, OXFORD, 1891 p.93。

[7] W. van der Gaaf, *The Transition from the Impersonal to the Personal Construction from In Middle *English,* Heidelberg, 1904, pp.1~3。
W. van der Gaaf 本書訳本も参照されたい。水鳥喜喬訳「W. van der Gaaf, T*he Transition from the*

論稿のうち、Sweet (1891) 、並びに W. van der Gaaf (1904)から当該箇所を以下①②に引用の上、検討を行う。引用すべく当該箇所が長きに渡るため、一部省略の上、(筆者により省略) とし、和訳については<訳例 (筆者による) > で示した。文中の下線は筆者による。

①Henry Sweet (1891) :　　257. Impersonal Verbs

Impersonal verbs, such as to rain, to freeze, to snow, to thunder, are words expressing natural phenomena..(筆者により中略) But as in English a finite verb must be preceded by a noun-word of some kind, the unmeaning it is prefixed as a prop-word — a purely grammatical empty subject-word.These verbs are called 'impersonal' because they allow of no variations of person. Nor can they be used in the plural

<訳例 (筆者による) >

Impersonal verbs とは rain, freeze, snow, thunder 等、自然現象を表す動詞であり、意味を持たない it つまり「単なる文法上の虚主語 (筆者註 : 非人称の it)」を主語とし,このため、人称変化の自由がない動詞であるところから' Impersonal (非人称的) と呼ばれる。また複数名詞が主語として用いられることも起りえない[10]。

下線部を注視すれば、Impersonal v. についての的確な定義が確認できる。しかし、ここではその史的発達についての指摘はなされていない。因って W. van der Gaaf (1904) から当該箇所を引用の上、、次に。その史的発達について概観する。

②W. van der Gaaf (1904) :　　CHAPTER I.

The former (註 : =impersonal verb11) have undergone no change in English (筆者により中略) As to the latter (註: = quasi-impersonal verb12) , the change to which they have been subject, affected them not only when they were quasi-impersonal, but also when they were employed as personal verbs (筆者により後略) What we are to understand is that in O.E and early M.E. there were a certain number of verbs, often used quasi-impersonally, which governed a noun or pronoun in the dativeor accusative and that in late M.E. the relation between these verbs and the nouns and pronouns so governed, became reversed, so that the former came to be governed by the latter, which became the subject of the sentence.

Impersonal to the Personal Construction in Middle English(翻訳) — (1)」『研究論集』関西外国語大学、1979　pp.241~243。

[8] 衛藤安治「後期中英語におけるいわゆる非人称動詞について」『福島大学教育学部論集』30(2), 1979 97~107 頁。

[9] 橋本功『英語史入門』慶応義塾大学出版、2005, 171~174 頁。

[10] 筆者註 : 非人称 it が主語であるため、定動詞は三人称単数形であるの意と解せる。

[11]筆者註 : Gaaf (1904) 論稿より Impersonal verbs の例を抜粋の上、以下に示す。
e.g. such verbs expressing natural phenomena, as it thunders, it rains, it is freezing

[12]筆者註 : 脚注 11 に同じ。
e.g. such verbs have it for their grammatical, provisional subject, while the real, logical subject is expressed in the form of a clause as, it seems he did not understand you; me-thinks(=it me thinks)

<訳例（筆者による）>

前者（筆者註：impersonal verb ）は英語史の上で如何なる変化も受けなかった。他方、後者（筆者註：quasi-impersonal verb)については、OE（古英語）及び eME（初期中英語）においては、疑似非人称的に用いられ、与格、または対格の名詞、代名詞を支配していた動詞もあったが、lME（後期中英語）ではこうした動詞とその動詞に支配された名詞および代名詞との関係が入れ替わり、その結果、前者（筆者註：疑似非人称動詞）が後者（筆者註：名詞および代名詞）に統率され、後者が文の主語になったことを把握する必要がある。

W. Gaaf (1904)による上の指摘は lME（後期中英語期）における Impersonal verbs (「非人称動詞」)から Personal verbs (「人称動詞」) への推移という史的発達を示す証左のひとつとなろう。 こうした推移を確認することは我が国の（蘭）英文法に関する種々の文献で「動詞」を検討する際（本論文では 5.で後述)、蘭英文典と英文典の解説にみる異同[13]の要因を理解するのに有効と考え、調査した次第である。

以上の検討結果を踏まえ、幕末期から明治初期に我が国に持ち込まれた（蘭）英文典（原書）において、Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs が如何に解説されていたか。また、そうした原書を底本とした訳述（蘭）英文典の中で与えられた訳語と概念、定義、並びに例文（句）について、以下、詳細な検討を加えたい。

5. Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs の訳語と概念、定義の変遷

先述（本論文 2.）した表【１】から【6】の各英文典より Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs の記載箇所を引用の上、これを比較、検討する。必要に応じ、筆者による和訳を付す。加えて、特筆すべきと考える事項を挙げ◆印で示す。さらに詳細な調査を要する点については、これを（疑問点①～④）とした。本論文 7.で考察する。なお、各引用文にみる Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs（これに相当する訳語「非人称動詞」、「自動詞」等も含む）並びに例文（句）の下線は筆者による。

表【Ｉ】

A『諳厄利亜語林大成』[14]（以下、『語林大成』と略称）

「凡例」[十丁表]「自動詞」

「又、流ルヽ雨フル等人の動かすことなくして自ら為すものあり是を自動詞と称す」

◆処々にオランダ語が添えられ「英蘭日三か国語対訳辞書」といえるが、上の「凡例」にみる例文（句）では、すべて日本語で表記、原語による記載がない。

◆底本とされる[15] B W. Sewel（1735）の当該箇所と照合したところ、『語林大成』にみる

---

[13] 例えば、蘭訳本から重訳した英文典では、‘Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs’の解説がされているが、その蘭訳本の底本とされる原書の英文典では ‘Impersonal verbs’の記述が全く見られない等の異同をさす。

[14] 本木正栄、馬場貞歴等譯編『諳厄利亜語林大成』、文化 11 年（1814)。

訳語「自動詞」（筆者注：現用語では「非人称動詞」）にあたる原語（蘭語、英語）は Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs と記載され、その例も A『語林大成』の例文とほぼ、一致していることが確認された。ただ、B では geenerlijke of onzijdige werkwoorden / intranitive or neutral verbs（筆者注：これは元来、現用語「自動詞」をさす。）の例として<branden / to burn, schijnen / to shine, zick zyn / to be sick[16] > が挙げられているが、『語林大成』ではこれに関する用語も、その例も挙げられていないことが判明した。底本 B に Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs と記載されていたにも拘らず、『語林大成』では現用語「非人称動詞」（若しくは、和蘭文典の訳語にみられる「不人活辞[17]」、「無人動字[18]」も含む）ではなく、「自動詞」なる訳語がなぜ用いられたのか(疑問点①)。この点については、後述の表【２】A『英文鑑』でも同じく疑問を呈するところであり、本稿 7.で検討したい。

B *Groot Woordenboek der Engelsche Taalen* [19]

【Dutch Grammar】

De ONPERSOONLYKE WERKWOORDEN

It reineth, it rains, het Regent. It did rain, het Regende.
It hails, het Hagelt. It snows, het Sneeuwt.
It blows, het Waait. It blew, het Waaide.

【De Engelsche Spraakkunst】

Of VERBS

Verbs are Personal verb / persoonlijke werkwoord and Impersonal verb / Onpersoonlijke werkwoord : Personal, as Ik hoor I hear, gy hoort,thou hearest, hy hoort he heareth, wy hooren we hear, &c. Impersonal, as het regent, it rains.

◆【Dutch Grammar】と【De Engelsche Spraakkunst】の二部構成である。後者では Impersonal verb / Onpersoonlijke werkwoord と記載されているものの、その定義には触れていない。例文は後者で１例(het regent, it rains.)だけであるが、前者では (It reineth, it rains, het Regent. , It did rain, het Regende.. It hails, het Hagelt. , It snows, het sneeuwt., It blows, het Waait., It blew, het Waaide.) の６例であり、かなり異同がみられる。

◆A『語林大成』では原文 het regent, it rains に対応した.「流ルヽ雨フル等」の例をみることから、本木正栄等が『語林大成』を訳編する際、上述の二部構成のうち、前者つまり蘭語で書かれた【Dutch Grammar】に依拠したことが明らかであろうと考える。

C （参考）『訂正蘭語九品集』[20] 「自動詞」

---

[15] 井田好治(1982)脚注 23 に掲げた同書において、以下の指摘をみる。
「正栄が、諳厄利亜学草創の業にはげんでいたころ舶載されたもので、「諳厄利亜国釈辞書原明和蘭国ウキルレム セウキル撰増訳引書」がある。（以下、筆者により中略）当然のことながら、セウエルの品詞分類法もまた『語林大成』と完全に一致するわけである。（以下、後略）」。

[16] 筆者註：最後の例 zick zyn / to be sick については、現用語「状態動詞」に分類される動詞であるところ、ここでは混在している。

[17] 大庭雪斎譯『譯和蘭文語』安政２年(1856)。

[18] 香處閑人『和蘭文典便蒙』安政４年（1858)、瑞井堂。

[19] W. Sewel, *Groot Woordenboek der Engelsche Taalen,* Amsterdam, 1735。 p.53

「Onpersoonlijke werkwoorden 自動詞ト云フモノハ人ノ事業ヲ指サズ自然ニナル處ヲ指スノ詞ナリ　即チ bewegen 動ク worden 成ル sterven 死ス regenen 雨フル等ノ詞類ナリ　都テ皆人力ヲ以テ為サヽルモノヲ云フナリ」

◆<Onpersoonlijke werkwoorden 自動詞>と蘭日対訳で記載され、ここでも「自動詞」なる訳語を現用語の「非人称動詞」にあたるものとして用いているが、その例には現学校文典でいうところの「自動詞」（前者３語 bewegen 動ク worden 成ル sterven 死ス）と現用語「非人称動詞」」（後者１語 regenen 雨フル）が混在する[21]。

表【２】

A『英文鑑』[22]　　［上巻巻之五　動辞　三］自動辞

「自動辞ハ称呼指辞 i, ik, thou, gij; he, hij 等ヲ冠セス唯中性 it, het ヲ冠スルノミ（筆者註：渋川の按文[23]を中略）即チ It rains, 雨降ル het regent,　It snows, 雪降ル het snoeeuwt. ノ如シ」

◆訳語に現用語「非人称動詞」ではなく「自動辞[24]」が当てられているものの、その定義解説、例文（句）については英蘭和の三か国語で記載されており、これは B *Engelsche Spraakkunst* と完全に一致する。『英文鑑』が B F.M. Cowan の蘭訳版からの重訳であることが裏付けられよう。

◆現用語「自動詞」にあたる動詞を「中動辞」に、現用語「非人称動詞」（例：It rains. It snows.）を「自動辞」に区分して訳語を与えている点で、先述した『訂正蘭語九品集』にみる混在がない。したがって、両者の概念に纏わる相異を理解した上で Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs なる範疇を渋川が認識していたことは明白であろう。しかし、渋川はこれを「非人称動詞」なる訳語を用いなかったのはなぜか（疑問点②）。その要因についても、先の（疑問点①）と同じく後述 7.で検討する。

B *Engelsche Spraakkunst* [25]

---

20 馬場貞由譯編『訂正　蘭語九品集』、文化 14 年（1817）。

21 先述した『和蘭文典便蒙』或いは『譯和蘭文語』（本稿 p.2 参照）では、Persoonlijke werkwoorden 並びに Onpersoonlijke werkwoorden にそれぞれ＜人活言（筆者註：現用語「人称動詞」）＞＜物活言（筆者注：現用語「非人称動詞」）なる訳語を与えている。蘭学から英学への過渡期にあって、その訳語にかなりの変化が見られよう。なお、この一例として岡田（2006）の指摘も以下に付す。
岡田和子「『和蘭語法解』の原典は Peyton の英文法書か」『外国語教育論集第 28 号』2006 筑波大学外国語センター、2006、pp. 164。
「『和蘭語法解』では＜人活言＞は英語で言えば“It rains.”のような動詞＜物活言＞以外のものをいうので内容的には〈活言〉（他動詞）〈中活言〉(自動詞）と重複することになる。」

22 渋川敬直譯述/ 藤井資補訂『英文鑑』天保 11－12 年（1840－41）。

23 「按文」について、「按」には「おさえる」以外に「考える」の意味があることから、「著者なりに解釈を付け加えさせていただくと」の意と解されるのではないか。『英文鑑』の中で渋川が頻繁に設けており、杉本（1993）の中で、その特徴のひとつとして指摘する。参照されたい。pp.640-641

24 杉本つとむ『英文鑑―資料と研究―』ひつじ書房、1993 年、pp.605~607。
「渋川敬直による<文法用語>の特異性（「動詞」を「動辞」と訳出する等）がここでも認められる。これについて杉本氏の見解「蘭学の伝統でほぼ定着したと思われる文法用語がここにみえないのである。」

25 F.M.Cowan, *Engelsche Spraakkunst,* Amsterdam, 1829。

Werkwoorden

Onpersoonlijke werkwoorden zijn zulke, die de Persoonlijke voor naamwoorden I, ik, thou, gij; he, hij; enz., niet voor zichdulden; maar altijd met het Onzijdige it vervoegdworden; als: it rains, het regent; it snows, het sneeuwt.

<訳例（筆者による）>

Onpersoonlijke werkwoorden（筆者注；現用語「非人称動詞」）は次のような動詞を指す。人称代名詞 I, ik, thou, gij; he, hij 等を自らの前に許容することはなく（筆者註：主語として冠することはなく）常に三人称単数中性を指す代名詞 het つまり it (同：非人称的代名詞)を冠して it rains, het, regent; it snows, het sneeuwt.のように活用、文を成す。

◆<自然現象を表す動詞>といった概念に触れていないものの、<it のみを主語とする>といった定義にまで踏み込んだ解説をみる。例文も『英文鑑』との異同はなく、正に『英文鑑』が本書 B からの重訳であることを示す証佐といえよう。

C *English Grammar* [26]（『英文鑑』原本）

◆Impersonal verbs / Onpersoonlijke Werkwoorden に関する記載が一切なされていない(疑問点③)。この要因についても本稿 7.で検討する。

◆F.M.Cowan が翻訳の際、L. Murray の *English Grammar* では記載のない Impersonal Verbs / Onpersoonlijk werkwoorden を動詞分類に組み入れている点を注視すれば、果たして F.M.Cowan が唯一、L.. Murray の *English Grammar* のみを底本としたと断言しうるであろうか。他に依拠した英文典の存在、或いは異なった版の存在も視野に入れ、調査する必要がある。今後の課題の一つとして他稿を期したい。

表【3】

A『英吉利文典(木の葉文典)』[27]（原題 *The Elementary Catechisms, English Grammar* [28]）

◆Impersonal verbs / Onpersoonlijke Werkwoorden に関する記載がなされていない。

B『英吉利文典字類』[29]（『木の葉文典』の簡易辞書）

◆上記の簡易辞書とされる。因って、同じく Impersonal verbs / Onpersoonlijke werkwoorden に関する記載がなされていない。

◆現用語「状態動詞」(例：belong.)を「自動詞」(例：walk)と 区別し、「中性動詞」としている点は注目するところであるが、現用語では「自動詞」として扱うべき語(例：sleep)も「中性動詞」として分類されており、混在する。

---

[26] Lindley Murray, *English Grammar* London, 1822。

[27] 『英吉利文典（通称「木の葉文典」)』慶応元年（1865）（原題：The Elementary Catechisms, English Grammar, London,1850）Q&A 形式による英文典であるが、各品詞についての簡略な解説に留まる。

[28] 石原千里「*The Elementary Catechisms,EnglishGrammar,* 1850—『伊吉利文典』、『英吉利文典』（木の葉文典）の原本」『英学史研究』(40) 日本英学史学会、2007、 pp. 37-53。

[29] 足立梅景譯編『英吉利文典　字類』、伊月村舎、慶応 2 年(1866)。

表【4】

A 慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』[30]

◆Impersonal verbs / Onpersoonlijke werkwoorden に関する記載がなされていない。

B 慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典』[31]　(A の原本：原題 *Primary Grammar*)

What are unipersonal verbs ?　　pp. 112-113

ART. 227.

unipersonal verbs (sometimes called impersonal), are those which are used only in the thirdperson with the pronoun it for a nominative; as it behooves, it seems, it hails, it rains,&c.

◆Impersonal / Onpersoonlijke verbs と明記の上、定義の解説、例文も記載されている。

◆注目すべきは、unipersonal verbs[32]の書き出しで始まっていることである。意味するところは impersonal verbs と同じであることがその文脈から容易に頷けよう。

◆A の原書である B では 動詞項目に unipersonal verbs / Impersonal verbs と明示、これに加え、その定義、並びに例文も記載されている。しかし、その直譯英文典である A では unipersonal verbs / Impersonal verbs にあたる訳語はもとより、その定義も例文もまったく確認できないのである。この点についても本論 7.で検討を行う(疑問点④)。

表【5】

A 『格賢勃斯英文典直譯』[33]

巻之下　第五十八ノ課

「一人働詞ト、如何ニトナレハ彼等ハ唯丶一ツ人稱ニ於テ用イラルヽ故ニ《一人働詞》ト○(筆者により後略)」—Methinks 我ｵﾓﾍﾗｸ you 汝ﾊ ought to 属ｽﾙ可ｸ beware 気ﾖ付ｸﾞ of 就ﾃ such 如比ｷ false 不信ﾉ frends［sic］朋友ﾆ.

◆訳語<一人働詞>から Unipersonal が意味するところを把握していたことが覗えよう。

---

30 永嶋貞次郎譯慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』、尚古堂、明治 3 年（1870 年）解説並びに、例文（句）とも片仮名交じりの和文だけで、英文での記載はない。

31 慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典』尚古堂、明治 2 年（1869）p. 113。

32 本研究対象とした英文典のほか、当該期において Unipersonal verbs についての解説が確認できた他の英文典(原書)*を以下に示す。参照されたい。

①*SMYTHE'S PRIMARY GRAMMAR FOR THE USE OF BEGINNERS.*
By CHARLES W. SMYTHE, A. M.,STROTHER & MARCOM PRINTERS, RALEIGH, N. C., 1861
UNIPERSONAL VERBS.　p. 57
<174>. Unipersonal verbs are those that are found only in the third person singular; as, It rains; It hails; It snows.

②*GRAMMAR containg the ETYMOLOGY AND SYNTAX of THE ENGLISH LANGUAGE.*
By WilliamSwinton, rikugokuwan tokio meiji juukyuunen honkoku 翻刻 六合館 p.79-80.
<150> Unipersonal verb is a verb used in but one person, namely, the third personsingular sometimes these are called impersonal, as though they had no person, but unipersonal is a more appropriate term.of unipersonal verbs there are two kinds;1.Those asserting natural phenomena: as, it rains, it will rain, it snows..the forms methinks, methought, methinks, is composed of me (i.e., to me) the directed object , and ' thinks' meaning seems.

33 大学南校助教譯『格賢勃斯英文典直譯』明治 3 年（1870）十七頁。

◆原本である下記 Quackenbos による B と照合の結果、定義に纏わる解説、また、その例文においても一致をみた。ただ、A、B 共に上の一例（Methinks you ought to beware of such false frends［sic］.）だけである。他の英文典にみる Impersonal verb （「非人称動詞」）の例とした it rains（雨ﾌﾙ）等は挙げられていない点を注視されたい。

B *First book in English grammar* [34] （A の原本）

LESSON LVIII　　pp.82-83

Unipersonal Verbs, because they are used in but one person.（筆者により後略）— Methinks you ought to beware of such false frends［sic］.

◆表【4】B『ピ子ヲ氏原板英文典』でみた unipersonal verbs と impersonal の併記こそされていないものの、A Defective Verb とした項目に続き、Unipersonal Verbs について、問答形式での簡略な解説をみる[35]。

表【6】

A.『ブラウン氏英文典直譯』[36]

百七十六頁　○　未完ﾌｿｸ動詞　（筆者により前略）

「人稱ナキ動詞ハ只タ三人稱ニ於テ用井ラルヽ　it rains 其ﾚｶﾞ雨ﾌﾙ　ノ如シ」

◆Impersonal verbs に訳語<人稱ナキ動詞>が用いられ、その例文(句)に原語(英語)と日本語の対訳による一例（it rains 其ﾚｶﾞ雨ﾌﾙ）をみる。

B『ブラウン氏英文典直譯全』[37]

二百九頁　○　不充分働詞　　（筆者により前略）

「不人稱働詞ハ唯タ第三人稱ニ於テ用スルナリ即チ　其ハ雨降ル　ノ如シ」

◆中西範訳の上記 A と同じく、Impersonal verbs に訳語<不人稱働詞>があてられ、その例文(句)として一例（其ハ雨降ル）が添えられているが、日英の対訳による表記はない。

C *The Grammar of English Grammars*[38] （A 並びに B の原本）

Defective Verbs.　　pp. 103-104

OBs.4—Some verbs, from the nature of the subject to which they refer, can be used only in the third person singular: as, It rains; it snows.; it freezes; it hails; it lightens; it thunders. These have been called impersonal verbs. The neuter person it, which is always used before them, does not seem to represent any noun, but, in connection with the verb, merely to express a state of things.

◆Impersonal verbs の扱いがあり、その定義も確認できる。ただ、上の訳述書 A, 並びに B では例文が一例（順に it rains 其ﾚｶﾞ雨ﾌﾙ、其ハ雨降ル）であるのに対し、原書 C で

---

34 G. P. Quackenbos, F*irst book in English grammar*, New York, 1875。

35 What are methinks and meseems callked ?この問いに対応した形で上記 B に引用した解説が続く。

36 中西範譯『ブラウン氏英文典直譯』二書房、明治 17 年（1884）。

37 源綱紀譯述『ブラウン氏英文典直譯全』的場文林堂、明治 19 年（1886）。

38 Goold Brown, *The Grammar of English Grammars* New York, 1877。

は、6 例（It rains; it snows,; it freezes; it hails; it lightens; it thunders.）であり、異同が認められる。

6. Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs の訳語と概念、定義に纏わる類型

上記 5.の検討結果を踏まえ、Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs に纏わる訳語（A.）並びに、概念、定義（B.）の類型を分類の上、これを表とした。次の 2 タイプに分類される（1~4 / 5~15 ）。なお、A 或いは B の記載がない場合、これを×印で示す。

	書名	A:現用の訳語「非人称動詞」に当たる訳語（ただし、原語の場合、原語で記載）		B: ①概念、定義 ②例文（語句）
		①非人称動詞	②①以外の訳語	
1	L.urray, *EnglishGrammar*	×	×	×
2	『英吉利文典』	×	×	×
3	『英吉利文典 字類』	×	×	×
4	『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』	×	×	×
5	『諳厄利亜語林大成』	×	自動詞	①人の動かすことなくして自ら為すものあり ②流ルヽ雨フル等
6	『訂正 蘭語九品集』	×	自動詞	①人ノ事業ヲ指サズ自然ニナル處ヲ指ス詞ナリ 都テ皆人力ヲ以テ為サヽルモノヲ云フナリ ②bewegen 動ク worden 成ス sterven 死ス regenen 雨フル等
7	『英文鑑』	×	自動辞	①称呼指辞 i, ik, hou, gij;he, hij 等ヲ冠セス唯中性 it, het ヲ冠スルノミ ②It rains, 雨降ル het regent, It snows, 雪降ル het snoeeuwt.
8	『格賢勃斯英文典直譯』	×	一人働詞	①彼等ハ唯ヽ一ツ人稱ニ於テ用イラルヽ故ニ《一人働詞》ト ②methinks 我ｵﾓﾍﾗｸ you 汝ﾊ Ought to

				属ｽﾙ可ｸ beware 気ヲ付ｸﾞ of 就テ such 如比 false 不信ノ frends 朋友ニ
9	『ブラウン氏英文典直譯』	×	人稱ナキ動詞	①只タ三人稱ニ於テ用井ラルヽ ②it rains 其ﾚｶﾞ雨ﾌﾙ
10	『ブラウン氏英文典直譯全』	×	不人稱働詞	①唯タ第三人稱ニ於テ用スルナリ ②其ハ雨降ル
11	W. Sewel, *Groot Woordenboek der Engelsche Taalen*	Onpersoonlijke werkwoorden Impersonal verbs		① × ②het regent, it rains.
12	F.M.Cowan, *Engelsche Spraakkunst,*	Onpersoonlijke werkwoorden Impersonal verbs		①die dePersoonlijke voor naamwoorden I, ik, thou, gij; he, hij; enz., niet voor zich dulden; maar altijd met het Onzijdige it vervoegd worden ②it rains, het regent; it snows, het sneeuwt.
13	『ピ子ヲ氏原板英文典（原題: *Primary Grammar*）』	Unipersonal / impersonal verbs		①those which are used only in the third Person with thepronoun it for anominative ②it behooves, it seems, it hails, it rains,&c.
14	G.P.Quackenbos, *Firstbook in English*	Unipersonal Verbs,		①they are used in but one person. ②Methinks you ought to beware of such false frends[sic] .
15	G.Brown, *The Grammar of English Grammars*	Impersonal verbs.		①The neuter person it, which is always used before them, does not seem to represent any noun, but, in connection with the verb, merely to express a state of things. ②It rains; it snows,; it freezes; it hails; it lightens; it thunders.

7．Impersonal Verbs に纏わる訳語類型の分析結果にみる疑問点

ここでは、本稿 5.で調査を必要とした事項（疑問点①~④）について考察する。表【Ｉ】

【2 】で検討した『語林大成』並びに『英文鑑』において[39]注目すべきは、当該期にあって、Impersonal Verbs の概念をすでに把握できていたことが推測される点であろう。これは、その底本とされる文典が共に蘭英対訳の英文典であることから、訳述者はまず、蘭文法により Onpersoonlijk werkwoorden の概念を認識していたことで英文法にみる Impersonal verbs が意味するところも容易に理解できたと考えられるからである。しかし、その概念を把握していたにも拘らず, Onpersoonlijke werkwoorden / Impersonal verbs を「非人称動詞」となぜ訳出されなかったのであろうか。先の疑問点①②である。

検討を試みたところ、この解明には『英文鑑』の処々に記された渋川の按文を詳細に調査する必要があろうという結果を得た。こうした按文を解読することで、渋川が「非人称動詞」なる訳語を扱おうとしなかった要因が解明されるのではと考え、この視点から疑問点①②を究明したい。以下、按文より当該箇所を引用する。なお、下線は筆者による。

『英文鑑』[上巻巻之五　第六章　動辞40]

「按ニ自動辞ハ原語「オンペルソーˆンレイキウエルキウオールド」本文無人動辞ノ義ニシテ稱呼指辞我汝彼ヲ冠セサルカ故二此名ヲ冠セシナリ<u>然トモ諸書ヲ参考スルニ皆其名ノ適当セサルコトヲ論セリ學社合着和蘭文典自動辞篇ニ曰　夫レ動辞ハ其事業ヲ為スノ主ナクンハアルヘカラス故ニ無人ノ名ヲ冠スルハ甚タ妥帖ナラス</u>（筆者により後略)」

ここで、渋川が Onpersoonlijke werkwoorden の概念、定義も十分に把握していながら「動辞」の特質上、動作主がないとする<**無人動辞**>なる訳語を当てることに疑問を呈し、諸書を検討した結果、其の訳語が妥当(適切)ではないと判断したことが確認できよう。

そこで、動作が他に及ばない(筆者註：目的語をとらない)といった働きから、「自動詞」なる訳語を渋川は用いたのではあるまいか。当該期にあって渋川の深い洞察力がみてとれる按文の一節といえよう。疑問点①②の要因が正にこの按文にあると筆者は考える。

次に、疑問点③[41]の要因について検討する。これには本論文 4.で確認した W. Gaaf (1904) を再考する必要があろう。左記の指摘[42]によれば、*English Grammar* が編纂されたのは< Impersonal verbs (「非人称動詞」) から<Personal verbs (「人称動詞」)>への過渡期であることから、そうした史的発達が齎す影響を大きく受けたことが *English Grammar* に Impersonal verbs に纏わる記載がないことの要因のひとつとして推測できるのではないか。ただ、疑問点③の要因を的確に究明するには、その記載の有無について、当該期の他の英文典を詳細に調査する必要があろうと考え、他稿を期したい。

---

39 『訂正蘭語九品集』は蘭学から英学へ移行の過程における蘭文法と英文法の比較、検討の参考として挙げるに留めたため、ここでは検討の対象としていない。

40 杉本つとむ『英文鑑—資料と研究—』<資料篇>　p.111、ひつじ書房、1193。

41 疑問点③とは表【2】C *English Grammar* で Impersonal verbs / Onpersoonlijke werkwoorden に関する記載が一切なされていないのはなぜかといった疑問を指す。

42 lME（後期中英語期）における Impersonal verbs (「非人称動詞」) から Personal verbs (「人称動詞」) への推移という史的発達を指す。

最後に、【４】から【６】では、明治初期に輸入、翻刻された原書(蘭/英書)或いは、訳述された各英文典を検討したが、そこで呈した疑問点④(本論文 p. 7)について考察する。中でも B の『ピ子ヲ氏原板英文典』では、動詞項目に unipersonal verbs / Impersonal verbs と明示の上、定義、例文も記載されていることは注視したいところであるが、その訳述本 A『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』には、これに対応する訳語はもとより、その定義も例文もまったく確認できないのである。これを以て、筆者は疑問点④とした。

比較、検討した結果、原書 B の<Section I THE PARTS OF SPEECH >では Unipersonal / Impersonal verbs は扱われておらず、これに続く<Section II THE PARTS OF SPEECH, THEIR PROPERTIES AND RELATIONS > に設けられた < DIFFERENT PARTS OF SPEECH >（筆者が思うに、いわば<発展編> として扱われている）の中で、Unipersonal / Impersonal verbs に関して<What's are unipersonal verbs ? Aet. 227.> とした問答形式による解説が付されていることが判明した。他方、その訳述本である A『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』（永嶋貞次郎訳）と照合したところ、同上の<Section II >の< DIFFERENT PARTS OF SPEECH >にみる訳述内容と原書のそれとは一致をみた。しかし、それは<What short method of conjugating a verb is used in parsing ? Aet. 220.>までの訳述であり、これを最終頁として留まっていることが判明したのである。

因って、疑問点④の要因は訳述者永嶋貞次郎が<Aet. 220.>までの訳述に留めていたことによるものであろうと考える。では、なぜ、Aet. 220 以降が訳述されなかったのか。さらなる疑問である。訳述の際、単に理解しがたく、意図して省略したことによるのか、或いは<Aet. 220.>以降の頁が欠損した刊本或いは、版年が異なった刊本に依拠したことによるものかは推測の域を出ない。ただ、筆者はその要因が前者にあると推論するものであるが[43]、仮に、後者とすれば、版年の異なった刊本を調査、検討することが必須となるが、その点に関しては別稿を期したい。

以上、本論文は Impersonal verbs（筆者註：現用の訳語「非人称動詞」をさす）の訳述起源を究明すべきものであったが、検討の結果、表【１】から【６】の各訳述英文典(明治 20 年頃まで）にそれを求めるのではなく[44]、さらに明治中期以降の訳述英文典、具体的には' *Practical English Grammar* [45]' 等以降にまで、その起源を究明すべく、さらなる調査、検討の必要があると結論づけるものとなった。

8. おわりに

---

[43] 仮に前者の原因によるものとすれば、当該期にあっては<訳述本>とされているものの、原書すべてを完全に訳述し得ていないことの一端がここにみてとれよう。

[44] 筆者は、訳述の時を同じくした青木輔清編述『英文典便覧』明治４年（1871）を調査対象に加えた。現用の訳語「非人称動詞」こそ用いられていないが、以下の通り、適切な定義がなされている。

「○無人動詞トハ it,代名詞ニ従テ唯三人称ニノミ用イルモノナリ it seems 其レハ見エル、it hails 雹フル、it rains 雨フル、等ノ類ナリ」　　二十四頁　（下線は筆者による)。

[45] 斉藤秀三郎 ' *Practical English Grammar* '1898-99。

以上、各英文典の検討結果を概観すれば、訳語と概念、或いは定義に纏わる不統一、些かの誤謬、或いは処々に異同さえ見受けられた。しかし、これは当時、我が国が「英学事始め」という黎明期における英語受容の背景を考慮すれば、避けられない結果といえよう。

したがって、我が国の英文典における文法用語の訳述起源の究明には、その検討範囲として我が国の時代背景のみならず、これに加え、英語史、殊に中英語期から近代英語期に関する十分な把握も求められることが明らかとなった。因って、本論文において考察を試みた Impersonal verbs の訳述起源の究明においても、初期近代英語期に現れた<非人称構文の人称構文への推移>についてのさらなる調査、検討が必須である。今後の課題と考え、これを以て、本論の結びとしたい。

【参考文献】

Mitchell, B. and F. C. Robinson(1964), *A Guide to Old English Seventh Edition,* Blackwell Publishing,Oxford,

Burrow, J. A. and P. T. Thorlac(1992)-, *A Book of Middle English, Third Edition,* Blackwell Publishing,Oxford,

Swinton, W. (1877), *A Grammar containing the Etymology and Syntax of The English Language,* Harper & Brothers, Washington

Saito, H. (1948), *Practical English Grammar One-Volume Edition,* Kairyuudou Pub.Co., Ltd.,Tokyo ,

井田好治(1968)「明治における英文法範疇・訳語の変遷」『言語科学』第４号、九州大学

(1970)「薩摩の英学（三)」『英語英文学論叢』第２０集、九州大学

(1975)「『諳厄利亜語林大成』の英文法論について」日本英学史学会編『英学史研究』８号

(1981)「日本の初期英語辞典(英語の辞書<特集>理論と実際)」『英語青年』127 号、研究社出版

岡田和子(2006)「『和蘭語法解』の原典は Peyton の英文法書か」『外国語教育論集第』28 号、筑波大学外国語センター

勝俣詮吉郎(1936)『日本英學小史』研究社

重久篤太郎(1932)『江戸英学史の片影』同志社高等商業学校商業研究会

(1941)『日本近世英学史』教育図書

朱鳳(2008)「馬禮遜的漢訳西書封日本的影響」『アジア分化交流研究』第３号

杉本つとむ(1969)「小関三英に関する覚書」(『国文学研究』40 号、早稲田大学国文学会

(1985)『日本英語文化史の研究』八坂書房

高梨健吉(1975)『日本の英語教育史』大修館書店

竹村覺(1933)『日本英學撥達史』研究社

豊田實(1939)『日本英学史の研究』岩波書店

飛田良文(2008)「「英文典直訳」と欧文直訳体 <特集> 資料研究の現在)」『日本語の研究』国基督教大学アジア文化研究所

平山直樹(2012)「『パストン家書簡集』における ME THINKS」(『尾道市立大学日本文学論叢(8)-(1)-(18)』

水野修身(2005)「明治期における' Voice ' をめぐる訳語に関する考察」『防衛大学校紀要 91 輯人文科学分冊』